

# 心理学のすすめ

中 瀬 惇

## 1. はじめに

心理学は、一般の人たちに関心を持たれ易い学問のようだ。研究対象に興味を持たれることは喜ばしい反面、研究方法について誰にでも手掛けられる簡単な分野と考えられるのには閉口する。事実、世間には、心理学者を名乗る素人が非常に多い。世間に知られている心理学者は皆、学問的な意味で心理学者と言えないと断言して良いほどである。外国の大学で食堂にたむろしてただけで、その大学に在籍したように言う者もいる。世間には、「××の心理学」という本が、書店に溢れている。マスコミにも本物の心理学者より偽物の自称心理学者の方が多く登場する。尤も、医師や弁護士を除くと職業の名称は、そのほとんどが自由に使用できる。特に学問の世界では、職業名称の使用が規制されている分野はないと言っても良い。誰も名乗ろうと試みないだけで、今日から、皆さんが物理学者を名乗っても、数学者や哲学者を名乗っても自由なのである。

厳密な科学的検証を伴わない心理学と称する話は、概して口当たりが良く誰にでも分かり易くて退屈しない。専門の医学的な話より、薬草や体操などで全ての病気が治るという話の方がよほど取っつき易いと同じである。最近では心の健康が注目され、「いやし」の流行で、何にでもセラピーと付ければ一つの専門領域となり、資格を持った専門家が養成されそうで気持ちが悪い。現在のように、「いやし」を広く解釈すれば、趣味やスポーツ・遊びなど全てはいやしと言って差し支えない。それどころか、芸術家を代表に、職人仕事まで多くの職業にもいやしの効果がある。この伝で行くと、「温泉セラピー」や「舞妓さんと祇園の御茶屋セラピー」等も保険で利用できるようになって皆が喜ぶかもしれない。飲み屋のお姉さま方は、生半可なセラピストよりよほど高度な相談といやしの技術を身につけている。でも、セラピストで御座いますと言われると客は通うまい。友人のスキー学校の校長に尋ねると、指導者養成の眼目はスキー技術の指導よりも都会の人が雪山にきて世間の憂さを晴らすお手伝いであるという。そこまで考えると、スポーツに限らず、世間に氾濫している「××講座」や「××教室」は、全て「いやし」の場と化す。そうして、何よりも最大のいやしの専門家集団は宗教家に違いない。

最近では、大学もいやしの場と期待されているようで困惑もするのだが。大学教育が持っているカリキュラムを考えてみれば、内容を十分に理解することが可能なのは同年代人口の精々2～30

%以下なのだから、現在の大学進学率を考慮した時、ほとんどの大学がいやしの場となっているのも当然だ。そのお陰で、ヒトやヒトのところに興味がありさえすれば、心理学は誰にでも始められる面白い学問だと考えられるようにもなった。心理学を専門としていると答えると、専門は何かと尋ねられる。言い淀んでいると、自分も心理学に興味を持ち本も読んでいるのだから内容を詳しく説明してくれと望まれる。言うまでもなく、「××の心理学」の類の本で、教科書でさえ本来の学術書を読んだという話は聞かない。中には、半分お世辞のように、先生のような研究をしたいので、そのための適当な場所や方法を教えてほしいとの質問に出会うことも希ではない。このような質問を受ける身にとって、お世辞というより、自分達の研究は、その程度に底の浅い日常常識で割り切れる学問だと思われているかとの思いを深める。おそらく、世間で取っつきが悪いと思われている、哲学者や数学者・物理学者などでは絶対に直面しない状況であろう。

しかし、心理学とは言っても、学問として取り組むとなると、それほど取っつきが良くはないし、科学的方法に基礎知識を持たない人に専門の内容を説明して理解を得るのは容易でない。一般人は、ヒトのころや行動について考えたり解釈すれば心理学だと考えるようだが、小説家ならいざ知らず、学問となるとそれほど単純な論理では研究が成立しない。学問を始めるために必要な基礎教養は幅広く、方法を身につけるには相当の覚悟と努力が必要である。心理学では基本的な方法として実験を用いるから、処理のために統計学は必須であり数学的論理になじめない人は断念した方がよい。専門家の中にも、自分に都合がよいように統計の適用を甘くしたり、勝手な解釈をする人があり専門家としての資質を疑うことにもなる。心理学について尋ねられた時、満足して貰える簡単な回答を思いつかず、答えに窮している。真面目に面倒な説明をすれば、その場の雰囲気や壊すだけであろう。一応、何かそれらしいことを答えるか、多少大人げないようではあっても、話を逸らすことになる。このように心理学は世間の理解と学問の実体が大きく離れている。筆者も定年退職を迎えるのを機に、少しこのような問題に真面目な回答を用意しておくのも悪くないと考えた。一人の心理学者が生まれるのに必要であった過程を少し詳しく振り返り、全体としてどのような仕事をしてきたかを述べることで、これから心理学を目指そうという人達の役に立てばありがたい。

## 2. 心理学の基礎

近年、生涯学習が流行している。勉強をしたいときに始めるのは悪いことではない。しかし、同時に、思い立ったときに思い立った対象や内容について、お手軽に学ぼうとする傾向が目につくのは、気がかりである。どのような分野であれ、手軽に始められる学問はない。それ相当の覚悟が必要である。現実には、年を取ってから初めての分野に取り掛かるのは容易ではない。それに引き替え、若いときに少しでも手掛けた分野を再開するのは容易である。それ故、生涯学習が盛んな世の中を目指すのなら、若者に出来るだけ幅広い教養を与えておくのが望ましい。生涯学習は、成人や高齢者を対象に始めるのではなく、若年時から始めるべきなのである。

## 心理学のすすめ

必要なことだけを楽をして手軽に手に入れようとする傾向は、世間一般に広がり、一般の大学生にまで蔓延している。筆者は、発達検査の開発に携わり、検査修得のための講習会などに呼ばれることが多い。手引き書があるにもかかわらず、自分で努力して読みこなそうとする姿勢に欠ける。考えさせられるのは、心理学の知識が乏しい受講生に限って、手軽な施行と解釈の方法を教えて欲しいことである。具体的な例を述べると、心理検査はまず全体の結果から解釈をするべきなのに、ある特定の検査項目の結果だけから解釈しようとする。「3歳児で“ある検査項目”が不合格であると自閉症だと聞いたのですが、その検査項目とはどれか教えてください」等の質問である、そのような便利な検査項目があるのなら全体の検査は必要がないことには考えが及ばないのである。

どのような学問分野に限らず、本来は取り組みの簡単な分野とか困難な分野などはないと思われる。ただ、個人にとっては得意不得意や趣味の方向があるから、向いている分野とか不向きな分野というのはあるかもしれない。実験室での作業が好きな人もあれば、図書館にこもる方が好きな人もいる。また、職場や日常生活の現場に出かけていく方が得手な人もいる。数学的な論理についてこれる人も、解らないからと初めから毛嫌いする人もいるというわけである。

心理学の不幸は、ヒトの心や行動について考えていた哲学の中から、言葉の論理に頼った考察だけではいつまでたっても一つの問題に決着が付かないと、別の方法で始めようとした原点にある。当時、最先端の科学として目覚ましい成果を挙げていた物理学を方法論の理想として、新たに独立してできた学問である。言い換えるなら、心理学は実験によって証明される事実だけでヒトの行動について新しい学問の体系を組み立てようと、哲学から実験科学として分離独立した新しい学問領域であることを忘れないでほしい。解釈や言葉の論理だけで学問を成立させると、言葉で扱える対象は全て取り扱うことが出来る。ヒトは言葉で考える。言い換えると言葉に無い事柄は考えられないのだから、このことは、対象に出来ない事象はないことにもなる。しかし、哲学の歴史が教えるように、ギリシャに始まる観念論と実在論の対立のように、いつまでたっても結論が得られない問題も生じる。実験科学は、実験によって明確な結論が得られる代償に、実験対象に出来る概念しか取り扱うことが出来ない。科学哲学の言葉で言うと、操作的定義の出来る概念しか扱えなくなり、扱える対象が非常に限定される。対象を限定する代わりに確実な結論を得ようとするのだが、実験科学としての心理学が生まれてみると、取り扱える概念に限界があると不満を持つ人達が出てくる。操作的定義が不可能なヒトのころまで全ての事柄を扱いたいのである。その結果、心理学とはヒトのころについて考えたり、ヒトのころの働きを解釈する学問だと称する人が出て来た。そのような人たちは哲学の世界に戻るか、“心の解釈学”などという新しい名前を名乗って、自由に独自の分野を開拓していくのが最も正しい解決方法である。実際には、そのような人達に限って、自分たちの目指していることこそ本当の心理学だと強弁したがる所にこの世の混乱がある。解釈と称して論理と呼べない小手先の理屈を並べて喜ぶ輩もいる。尤も、名前を使われるのは心理学が確かな科学として認められた証拠として喜ぶべきなのかもしれない。既成の学問分野に対して、方法論が気に入らなくて新たな研究分野を作ることに異

論を挟む必要はないが、後から始める者が新しい名を名乗るべきことだけは当然の約束事であろう。

少し話がそれたが、これまでやってきた自分の研究がどのような基礎の上に形作られていったかを考える本来の目的に戻るなら、自分の一生を振り返らずを得ない事になる。研究とは、簡単に始めればよいものではなく、どのように取り組んだところで、自分が興味を持つ問題や、それを明らかにしようとする方法をどのように選択するかの特典で、否応なくその人の全体が関わってくると言わざるを得ないからである。

### 3. 心理学を始める前

#### 3-1 小学生時代

心理学を始める基礎となった興味や考え方がどのように形成されてきたかを述べる為には、いつの時点から始めるべきなのだろう。好奇心が強く理屈っぽく議論好きに育った理由を明らかにしようとすると、生育史そのものを語らなければならないのかもしれない。しかし、形成過程について自覚的な記憶があるわけではないし、形成された結果と過程の因果関係は明確でなく、関連性を見る論点には、一般的同意が得にくいだろう。

自覚的な記憶に基づいて説明しようとすると、小学校の6年生が適当であろう。漫画や猿飛佐助・塚原ト伝などの講談本を別にすると、意図的に選択して本を読んだり、課題の内容を含めて勉強の記憶が生じるのが、6年生だからである。この学年は、担任の先生だけでなく多くの友人の名前を記憶し、未だに年数回は一緒に旅行したりして遊んでいる印象深い学級でもある。就学後、疎開等で4回転宅し、広島県の山深い学校に学んだりしたが、転校を繰り返して都合の良いことに入学した小学校で卒業した。出身校の東京都世田谷区立松原小学校は、6年生になってクラスの編成替えがあり、我々の6年2組に、滝澤澄子先生が赴任された。先生は、お茶の水を卒業して赴任された若く熱心な先生で、先生の印象と共に勉強に関して最初の記憶が重なっている。自覚的な意味で、基礎はこの学年から始まった。クラスを支配していたのは山下良江、野口千代江、千羽多美子、滝山恭子という美人で成績も優秀な4人の女の子達であった。恭子ちゃんは、小柄でおちゃっぴいな女の子であったが、残りの3人は、背も高く落ち着いてお姉さんの雰囲気があった。千代江さんはお澄ましてただ遠くから憧憬の眼差しで眺めていた。置いてきぼりにして、一人勝手に天国に行ってしまった鈴木将夫とは、学校帰りに毎日のように校門から我々二人の自宅とは反対方向に出発した。よその町内を訪問して一通り遊んだ帰りに立寄ると、もう宿題を済ませた多美ちゃんは自宅の前で鞠つきかゴム飛びをしていた。その邪魔をしてから帰途につくのが二人の日課であった。男の子では、勉強が趣味であった貴公子の三夫君、いつも一緒に遊んだ優しいお坊ちゃんの栄介、子どもの時そのままに道化の才を持ち司会業で活躍している四郎、館山で漁船を持って漁師(?)になった員明、卒業してからの方がよく遊ぶようになった英敏や雅司等々、未だに一緒に遊んでいる友達が多く名前を挙げ始めるときりがない。卒業後、京都へ

転居したのだが、控えめな美人の野坂泰子さんはよく手紙で勇気付けてくれた。最も身近な良江お姉さまは、ママゴトでは常に破壊者だったにも関わらず、宿題の面倒から日常生活の世話まで優しく見てくれただけでなく、卒業後もずっと叱咤激励して、まるで躰け係かお目付役のようなヒトであることは未だに続いている。しかし、皆さん悪餓鬼の悪戯などには微動だにせず、我々は勉強だけでなく全ての面で頭が上がりなかった。尤も、頭が上がらないことだけは今でも続いているのだが。

さて、自分の記憶の中で、歯ごたえのある本に取り組んだ最初の記憶は、6年生の宿題に始まる。もちろん、夏目漱石の坊ちゃん等は当時どこの家にもあった改造社の円本で読んだりしていた。義務的な読書として取り組んだ最初がこの夏休みの読書感想文である。文学的興味が芽生えていたわけでもない小学生にとって、本の選択には大変苦勞した。予備知識も何も無しに自宅の本棚の中から題名だけを見て興味が持てそうな作品を探した。最終的に、「罪と罰」を選択することにしたのだが、ドストエフスキーが何であるかも知らずにである。スタンダールの「赤と黒」との比較に数日悩んだ記憶がある。小学生の高学年は、悪とか黒魔術などの言葉に憧れ、犯罪の匂いのする本の題名に興味深く見えたのである。夏休み、本を抱えて親戚に一ヶ月ほど行き、読もうとして苦勞した。何しろ、読み始めようとするのだが、何がなんだかさっぱり理解出来ないで興味が持てず、始めの数頁を何回読み返したことか。その内、夏休みも終わりに近づいたので、判るかどうかなどはお構いなしに、面白さも何も無視して、ただがむしゃらに読み進めた。しかし、不思議なもので2・30頁を越えると兎にも角にもその表面的な意味だけは少し分かるようになり、読み易くなって行った。もちろん、作品の内容を理解したというような水準にはとうてい及ばず、期待していた犯罪や活劇があるわけでもなく、何か薄暗いところで退屈な物語が展開するというのが正直な感想であったと思う。身に付いたことは、どんなに難しい本でも最初の数十頁を我慢すれば何とか読み通すことが出来るという自信のようなものであったろう。勝手な解釈だが、もし「赤と黒」を選んでいれば、文学の虜になっていたのかもしれない。

6年生の勉強で記憶に残っていることは、大嫌いな日記や作文などの宿題があっても、必ず別に自由研究という課題が付加されていて、自分の好きなことを纏めていけば評価してもらえたことである。小さい頃から文学的な素養に欠け、文学志向の国語教育にはまるで興味が持てず、下手さも重なり字や文を書く課題が大の苦手であった者にとって、この抜け道の存在は有り難かった。国語教育への嫌悪感は、その後も強くなっても弱まることはなかった。思い起せば、授業中の悪戯は国語の時間に多い。「ローソクの科学」等を読んで実験の真似をしたり、モーターや電車を造る等の工作もしたが、ある時、興味のある世界の産物を絵地図に書いて褒められ、それ以降、味をしめて産物を変えては絵地図を多用した記憶がある。そのとき以来、地理が得意となり、試験では不思議と良い成績がとれたのは思わぬ副産物であったろう。

### 3-2 中学生から高校生

中学3年生から高校1年生にかけて、仲間と一緒に夜毎、先生の自宅に遊びに行くようになっ

た。当時の仲間は、現在遠方に散らばったが、未だに何かと集まって騒いでいる。先生に教えられ碁を覚えてざる碁の競争もしたが、同時に当時の青年にとって普遍的な読書の道筋を啓発された。「次郎物語」に始まり「三太郎の日記」に繋がるような本である。先生の指示で、ニールの「恐るべき学校」や「問題の教師」等も読んだ。先生は、その内容についての議論を望まれ、興味を示し議論に応じていた仲間もいたが、個人的には教育の問題に興味がわかかなかった。その友人は後に全共闘活動の中で頭角を現すことになる。やはり中学3年生の時、数学の先生には大学の予科で使用された微分積分学の教科書を渡され、自分で問題を解いてくるように指示された。あまり真面目には取り組まなかったのだが、微分の初歩を独力で読んで問題を解けた時の喜びの方が合っていた。

高校生になると、クラブ活動が忙しく、7つのクラブを掛け持ちし、合唱部や文芸部だけでなく、化学部・理工部・地学部等で連日のように、夜遅くまで学校に残り、帰宅は8時を過ぎていた。化学の準備室で澱粉からブドウ糖を生成したり、テレビや電気自動車を組み立てるのを手伝ったり、地質調査と称して山登りを、天体観測と称しては終夜観測をした。その間には、先生の軍隊当時の経験談等を聞いて楽しんでいた。

高校時代の読書は岩波新書等、新書版の読書が中心であった。高校生になると、ヘッセの「車輪の下」やロマン・ロランの「魅せられたる魂」だけでなく、カフカの「城」「変身」なども読むようになり、小説とは壮大な創作物であると知った。そうすると、日本の小説とは日記のような物であると感じたし、更に、著名な漢詩家の孫で文学的造詣が深く中学生時代から漢詩を作っていたような友人を持ったことも己の非才を悟り、文学書から離れる原因となった。丁度、近所に本屋に勤めていたお兄さんが住んでいたこともあり、「哲学入門」から「ゼロの発見」など手当たり次第に読んでいた。対象は哲学や数学だけでなく、素粒子など物理学関係の本も興味深かった。稲村耕作の「色彩論入門」を読んで以来、目に良いからとクリーム地のノートに緑のインクで字を書くようになり今でも知人を驚かせている。後に専門となる心理学関係の本は、宮城音弥、南博、島崎敏樹を岩波新書は全て目を通した。今でも残っているのだが、フロイトの「精神分析学入門」上・下・続の3冊と「夢の分析」の4冊は、丁寧なノートを取って読破している。読み始めた時、全ての世界を明らかにする占いの本のように興味深かった精神分析は、夢の分析に至ってそれまで臆に考えてきた疑問が明確な形となって現れてきた。それは、象徴の意味付けがフロイトが言ったと言う以上の意味で証明され得ない点である。分析に取り上げられているような高尚な夢と縁がなく、日常生活と結びついた卑近な夢に満たされている人間にとって、それこそ夢物語に思えたのであろう。哲学書の方が取っつきは悪いが論理的整合性はある、取り組むに値する対象に思えた。このような読書遍歴やクラブ活動での実験体験は、その後の興味や考え方の形成に大きな影響を及ぼしているように思う。

ミケランジェロやダ・ヴィンチから、ロダンやブルデル・マイヨールのデッサンに魅惑され、マチスやブラックの構成力や色彩力に画家になる自信をなくしたのと同様、数学や物理学・化学や基礎医学の研究は、非常に興味深くはあったが、壮大な整合性に付け加えるべき内容を見つけ

る程の自信を持てなかった。偉大な先人の話を知るにつけ自分の才能では取り組むべき対象とは思えなくなったのが正直なところか。要するに、観客席にいる方が幸せだと考えたのである。「若者は、無限の可能性を信じて、自分のやりたいことをするべきだ」と言われる。言葉としては美しいが、幼児や小学生ならいざ知らず、自分の方針を具体的に選択する年齢になっていれば、現実離れも甚だしい。心理学では自己評価と呼ぶが、自分自身や自分の能力を正しく知り、身の丈にあった目的を正しく選ぶことこそ重要である。心理相談を受ける立場になると、幻のような実現可能性のない目標に振り回されて自滅する多くの若者に遭遇する。無責任な世間の励ましに困惑するしかない。

高校も終わりに近づくうちに、なんとなくヒトの中身か容れ物を作る仕事が面白そうだと考え始めた。具体的には、こころの中身を取り扱う心理学と容れ物を作る建築が将来の目標として浮かんできた。高校を卒業して建築の勉強に手を染めかけたのだが、仲間に、一頭地を抜くデザイン感覚を示し、先生にいつも注目されていた友人がいた。彼の家へ遊びに行った時、君の才能は凄いと感心すると彼は特別にその秘訣を教えてくれた。彼の叔父さんに北ヨーロッパの大使がいて直接新しい雑誌を送ってくれるのだそうである。丸善に予約しておいても雑誌は3ヶ月から半年は遅れる時代のことである。雑誌の真似をして作ればよい。ヨーロッパに親戚がいないなら、自分が使った後で良ければ、君にもその本を貸してあげようといわれた。好意に満ちたこの申し出は、建築家への興味そのものに水を差すことになった。決定的なのは、当時の日本を代表する建築家で、東大の教授であった丹下健三が東京都庁舎（東京駅の傍にあった）の設計で建築学会賞(?)を取ったのだが、それがバウハウス一門の逸材ニース・ファン・デル・ローエによるブラジルの新首都ブラジリアの中核となる高層建築のタワー部分を切り取った下層部分とそっくりで、それを小規模にした物であったことである。なお、バウハウス一門には3人の逸材がいるのだが、コルビジェとライトが有名で、最も優れているローエが知られていないのもきわめて日本的である。一般的に言って、素材を借りてきて壮大な構造物を作るのは、どのような分野でも偉大な創造作業であるに違いないが、偉大な創造物の一部分だけを取り出して作った小さな作品は、日本の童謡などにもよく見られるように盗作と呼ぶほかはない精神作業である。

今振り返って幸せだったのは、筆者が通った中学や高校は、戦後の混乱から十分に立ち直ってなく、学校には生徒を縛る規則がほとんどなく、高校では毎日8時過ぎまで遊んでいたが門限もなかった。また、復員して他に職場がない非常に優秀な先生方に恵まれた。教科書の勉強より自由な読書と議論に花を咲かせられた時代に育った。毎日遅くまで相手をしてもらったことには、今としては信じられない思いがするし、議論の内容など思い起こしてみれば、今の大学の先生より、よほど優秀な人材がそろっていた。

### 3-3 教養部時代

心理学を目指して文学部に入学したのだが、それでも専攻を決定するについては迷いもあった。仲の良い友人や先生に他の専攻に誘われたからである。絵が描けるからと人文地理への進学を強

く勧誘した有名教授もいた。読書の相手には、一緒に哲学に進もうと誘われた。教養部の当時は、学生運動が盛んな時期で、マルクス・レーニンなどの本を読んでは友人と議論をするのが一般的風潮であった。本を読む意欲の原動力は、次の議論に勝つためであったように思う。同時に、友人とヘーゲルの読書会もした。論理と理屈は本来決定的に異なる。しかし、学問の世界でさえ、理屈と論理をはき違えた人は多い。理屈だけの人にこの相違を解らせるのは至難の業である。先にも述べたように、論理の世界でさえ、言葉による議論はどこまで行っても結論を得難いことに不満を感じるようにもなっていた。実験による確実な結論が求められる分野に興味が固まっていたと言うべきかもしれない。このような長期にわたる精神的遍歴の中から、結果として心理学を選んだのであって、「どうして心理学をやるようになったのですか」、「人の気持ちが分かるからですか」、等という質問に対して、一言で簡単に答えられるような事柄ではないのである。

ただ、このように書いてくると、読書に励んでいた真面目な学生像を想像されそうで面映ゆい。事实は、市内から宇治分校に通い、未だに悪縁が続いている悪友達と黄檗山や宇治の山を徘徊し、途中下車をしては四條河原町周辺を散策する方がずっと主要な時間の過ごし方であった。その後、読書会や議論の相手は学問の世界を離れて音信もなく、遊び仲間が大学に残って社会学や人文地理学の権威となり、未だに交友が続いている。ただ、二人とも学部長など無駄な雑用が好きなようであるのも面白いのだが。

#### 4. 心理学を始めて

我々の大学は、3回生になって専攻が決まる。心理学を専攻することになった最初の集まりで、主任教授の園原太郎先生は今日から君たちを一人前の研究者として扱うと宣言された。嬉しい緊張を覚えたのだが、自覚のないやつは放っておくとの宣言でもあった。専攻が心理学と決まっても、専門分野の選択は簡単に決まるわけではない。学部に入った時、当時の心理学研究室には、園原太郎教授、柿崎祐一助教授、本吉良治助教授と3人の先生方を囲んで発達研究会、知覚研究会、学習研究会があり、非常勤の先生と大学院生を中心に社会心理研究会と4つの研究会があった。振り返ってみると京大心理学の黄金時代であった。3回生も皆いずれかに所属するようになっていた。取り敢えずは、社会心理研究会と発達研究会に属していたが、知覚研究会にも参加したことがあるし、興味は多岐にわたっていた。それどころか、既存の研究会だけでは満足せず、友人の岡部禮と名倉敬太郎先輩を指導者に頼んで新たに臨床心理研究会を作った。その後、学生が勝手に多くの研究会を作る契機となったのは、悪影響であろうか。

大学院になって、同好の仲間が集まって「集団と創造性研究会」を作り、中学生を対象にした小集団実験をした。その成果は、日本心理学会において1966・1967年に「集団と創造性」(その1)～(その6)として発表している。参加者は、園原太郎・梶田叡一・辻平治郎・島久洋・高木修・向井泰彦・鳥山平三・薮内稔であった。その中で筆者の興味は、主として創造性とは何かということにあり、創造的課題の作成や産出された作品の創造度の評価にあった。



博士課程を終わろうとするとき、園原太郎先生に呼ばれて研究室に伺うと助手になる気はないかと問われた、嫌だというと何故だと不審な顔をされた。京大の助手は、先生方の世話をするだけではなく、学生達の世話までしなくてはならない。しかも、助手は3年任期である。自分にとって良いことは何もない、短大でも良いから、初めから助教授くらいにしてくれと言うと、それなら簡単だと破顔一笑、大笑いをされた。それから、これまで自薦他薦で誰それを助手にしるという交渉は山ほどあった。中には、自分の様に優秀なのを助手にしないとほけしからぬと学生に怒られたことさえ有るが、お前のように助手にしてやろうと言って断られたのは初めてだと、大喜びをされた。考えてみると、園原先生には随分可愛がられたけれど、そのきっかけであったように思う。直後に大学紛争が発生して、先生方は助手共々大変な目に合われた。そのころ助手だった仲間は二人ともこの世にいない。助手を引き受けていれば、今生きてはいまい。

## 5. 研究課題と資料

定年退職することになり、夏期休暇を利用してこれまでの研究資料の整理を始めた。それを機会に、現在所有している資料を見直すことにより、これ迄の研究を振り返って見るのも悪くないと考えたのが、この論文の始まりである。研究の開始は、必ずしも修士課程を修了した後ということではないが、所期の目的から、年代順よりも研究内容によって分類して説明を加えていこうと思う。

### 5-1 卒業論文と修士論文

卒業論文(1963)は、「社会的場面における個人差の研究—特に同調行動に関して」を書いた。小学生を対象とした小集団実験であり、アッシュ・タイプの課題(点の数)を使用し、伝達情報を操作して集団の判断が個人の判断と異なったときに生じる同調行動の型と性格検査による性格特性の関係を調べた。具体的には、小学校5年生75人に京大NX知能検査, YG性格検査, 適応性診断検査(金子書房版), ソシオメトリーを行い、5人の集団成員が均等になるように15集団に分けて集団状況で同調課題を行い、後に個別面接を行った。今考えると、心理検査は、現実的妥当性が明らかでない以上意味がないという、今の考えの芽生えであったのかもしれない。

修士論文(1965)は、「思考様式の研究—アナログ型とデジタル型について」である。米国の創造性研究において第一線の優秀な建築家を対象とした創造性研究で見いだされた性格特性と創造性の関係を基に、そこで明らかとなった性格特性を取り出して、関連する思考の形式や思考の柔軟性を調べようとした。創造的な建築家との関連が見いだされたMBTI(Myers Briggs Type Indicator)は、ユングの類型を測定するための検査であり、修士論文に使用するため、原著者に使用許可を取り、日本版を作成した。最初の標準化作業とA-D図形(アナログ型とデジタル型図形)への好み検査は、京大生男子117人と奈良女子大学生131人を対象に集団法で行った。個別法による思考実験は、心理学の学生と大学院生である同級生や後輩27人を捕まえて、思考課題

と共に知能検査と性格検査を行った。嫌がらずに検査を受けてくれた友人たちに敬意を払わざるを得ない。

## 5-2 臨床活動

### (1) 京都市児童院

大学の4年生になったとき、名倉氏から京都市児童院で「巡回子ども相談室」の担当をするように奨められた。以来、非常勤嘱託の心理判定員として1963年から1987年まで25年間週1回勤務することになった。自発的に始めた仕事ではなかったが、研究活動と並行して臨床の現場にも触れることになったのである。児童院の経験を土台として、その後、臨床の現場は広がり、福祉の現場との関わりを持つ基礎となった。

最初に担当した「巡回子ども相談室」は、京都市が遠隔地の市民のために出張して児童相談所の業務を行うための単費事業である。児童院から遠距離の右京区・東山区・伏見区と3箇所の福祉事務所に、テスターと呼ばれる専任の女性職員と非常勤嘱託の学生が二人一組で出張していた。心理判定員の仕事はテスターの検査に基づき判定・相談であったが、必要なときには就学に関する証明書を発行したり、養育者への相談だけでなく、週一回の遊技治療を継続したりもした。経験を積んだ有能な専任のテスターと未経験な学生であったから、丁度、研修医と看護婦長のような関係で、教えられることも多く、横にいる専門家の目を意識しながら相談活動に従事することは良い経験となった。筆者は伏見区を担当し、伏見福祉事務所に7年間通った。隣接する板橋小学校の特殊学級担当の先生とは子どもの受け入れでお世話になったし、協力し合いながら子どもへの取り組み方法を工夫し、学級の中で子どもの変化を見ることが出来たのは、後の為に非常に良い経験となった。当時は、日本で小児自閉症が一つの診断名を得た頃であり、筆者自身が最初に見つけた典型的な小児自閉症児もいた。余談であるが、この点について述べると、近年、統計上は、自閉症児と呼ばれる子どもが非常に増加し、診断基準に疑問を持つ。情緒障害を伴った発達遅滞児が皆、自閉症児と呼ばれるようになったのではないか。症候群の範囲を広げることは、原因が異なった子ども達をひとまとめにすることになり、病気の原因究明や治療方法の確立にとってかえって障害となる。

その後、厚生省が全福祉事務所に「家庭児童相談室」を設置することになり、「巡回子ども相談室」は役割を終了した。京都市では子ども相談室が定着して業務内容が住民に浸透している福祉事務所から家児相を設置することになったため、移行期には子ども相談室と家児相を併設して家児相相談員のスーパーバイザーをして業務を移管し、我々心理判定員が新たな福祉事務所に出張して家児相開設の準備をした。全ての福祉事務所に家児相が完成して余剰人員となった我々は新しい業務の開発を依頼され、児童福祉係長と協力して幾つかの仕事を実践した。その中で定着したのが就学前の精神発達遅滞児と母親のための相談事業であった。当時、保育所や幼稚園では発達遅滞児など障害児は受け入れられなかった。保育所にとって、保育に欠けるとは養育者がいないことであり、障害児は対象外であったし、集団になじめない子どもは幼稚園でも受け入れる条

## 心理学のすすめ

件が整っていなかったのである。一般児童が集団を経験して就学するのに対して、対人関係に弱さのある障害児の方が集団の場を経験せずに就学しなければならなかった。集団に入れないからと断られる子ども達こそが、最も集団生活を経験する必要があったのにである。そのような子ども達への場を提供する目的で始めたのがこの事業である。詳しい目的や経過は、文献に詳しく説明しているので、ここでは簡単にまとめる。当初「母子教室」の名前で、予算も場所も人手もなく開始した事業は、玩具の費用とボランティアの交通費からアルバイトの人件費へと徐々に発展した。その後、単費事業となり、伝統ある京都市児童院が廃止されて児童福祉センターと名称を変更したときには総合療育事業と名付けて専任職員による新規事業となった。母子教室の資料は、内容の一部を学会や論文で発表しているが、その他にも集団の話し合いの過程を詳しく記録している。

### (2) 聖ヨゼフ整肢園

児童院の院長室に呼ばれて嶋津峯真院長に依頼され、1975年から聖ヨゼフ整肢園内の重症心身障害児施設「麦の穂学園」に非常勤嘱託として通うことになった。その後、小児科外来で発達検査を行ったり、整形病棟の入院患者の相談を受けたりと、園内全体との関係が生じ、現在では専任の心理判定員がおかれるようになった。園内に併置されている市内唯一の私立養護学校である聖マリア養護学校（肢体不自由児）においても就学時を中心とした心理判定を行った。園内の作業として取り組んだのは、「麦の穂方式の重症心身障害児・者のための行動記録表」の作成である。従来行われていた発達検査は、麦の穂学園に入所している重症心身障害児に対しては一桁の発達指数を与えるだけで、それも一つの情報ではあるが子どもの発達を詳しく知る資料としては不十分であった。そこで、作業班を組織して、子ども達の姿を観察して、一人一人の子ども達の様子を詳しく知るために、独自の評価表を作成した。

### (3) 京大病院

富山医科薬科大学から京都府立大学に赴任して一番不便であったのは、新生児と触れ合う場が得難い点にあった。所属が医学部から文学部に変わったためである。丁度、富山の佐々木博医学部長(後の学長)が京大医学部の出身で三河春樹小児科教授と同級生であった縁で、1987年から京大小児科に出入りすることが許された。新生児集中治療室(NICU)である京大病院未熟児センターにおいて、早期産新生児を中心とした行動観察を行い、NICU退院児の追跡医療が目的である付属病院小児科外来の「未熟児外来」において、子どもの発達検査と母親の相談を行っている。臨床的活動でもあるが、目的は新生児や乳児の発達を調べることにあるので、内容は後に記載する。

## 5-3 性格検査

卒業論文以来、性格検査の研究にも興味があり、いくつかの研究を行った。

修士論文で使用した、MBTI(Myers Briggs Type Indicator)標準化作業の内容は、1974年・

1975年に「Myers Briggs Type Indicator」の日本版作成（その1）～（その2）として、日本心理学会で発表した。その後も、標準化の研究を続けて付表に示したような資料を得ている。

同様に修士論文に使用したロールシャッハ検査についても、反応の決定因と図形特性の関係について実証研究が必要と考えた。臨床心理研究会の中に「ロールシャッハ研究会」を組織して検討した。決定因を明らかにするために通常の彩色図版だけでなく、無彩色図版・濃淡のない図版・輪郭だけの図版と4種類の刺激図版を作成して反応を調べた。幼稚園児と小学生については個別検査が必要で、研究会の全員が協力して資料収集をした。成果は1968年から1973年に日本心理学会で「ロールシャッハ図版における刺激要因の研究」（その1）～（その8）として発表した。研究会の会員は、大平典明・金光義弘・鳥山平三・森下正康・多屋頼典・千葉節子・山田和子・中島順子・金児暁嗣・松嶋隆二である。その後、集団法によって中学生・高校生・大学生の資料を収集した。今回、改めて資料の整理を進めて表に纏めたが、中学生と高校生の資料は未発見であるなど、更に調査を続ける必要がある。

そのほかに、高木修と動詞対を使用して性格測定を試みたことがあり、高校2年生163人の結果を報告している。

現在、心理検査については、現実的妥当性の証明が何よりも重要だと考えているが、以上のように研究を改めて並べてみると、自分自身の興味が以前から現実的妥当性にあることが解って興味深い。

#### 5-4 新版K式発達検査(Kyoto Scale of Psychological Development)

創造性研究への興味は現在でも続いているが、創造性を調べるためには、基礎となる知的機能について知る必要があり、成人の知的機能を明らかにするためには、乳児期に遡って知的機能の形成過程を調べる必要を感じるようになった。一方、京都市児童院で作成使用されてきたK式発達検査（旧K式検査）を公刊するべき差し迫った必要性が生じ、改訂と再標準化作業が必要となった。共通の恩師園原太郎先生のお祝賀会が開かれた日、嶋津峯真児童院長の呼掛けで、大阪市大の生澤雅夫・児童院の松下裕と4人が嶋津先生行きつけの地下ビヤホールに集合した。以来、現在「新版K式発達検査」として親しまれている発達検査の公刊作業に参加することになった。心理検査を作成するには、大規模な標準化作業が必要であり、一旦、検査を公表すると、維持のために多くの追加作業が必要となる。検査は公表した瞬間から時代とずれていくのだから、新陳代謝をはかる作業は常に必要である。新版K式発達検査では、新しい版を作成するための作業を現在でも継続している。我々にとって、検査の拡張は公刊時から一つの目標であった。現在、3ヶ月児から14歳までを検査範囲としている検査の対象範囲を年少側にも年長側にも拡張したいと考えている。

新版K式発達検査の標準化作業について、学会発表は、1981年以来、今年で26回を数える。一つの検査を作成するためには、京都市児童院において、25年間、毎年1万人以上の使用を積み重ねた臨床実績があつてさえ、標準化作業として収集した最初の1501人の資料だけでは不十分であ

り、別に多くの資料が必要となった。研究者が各自に付け加えるべき多くの研究もある。筆者の資料には、発達の終末年齢を理論的予測ではなく、実際の資料で明らかにするための研究がある。その他にも、検査項目の判定基準を明確にするためには、検査項目を取り出して研究する必要性が生じ、「絵の叙述」「財布探し」「了解」「数の復唱」等幾つかの検査項目を検討した。

#### 5-5 乳幼児の初期発達

新版K式発達検査を拡張するに当たって個人的に興味があったのは年少側への拡張であった。その為には、新生児期の発達過程を明らかにする必要がある。早期産新生児が増加してくると、乳幼児について出生週数による修正も必要になる。乳児の発達研究は、新版K式発達検査を標準化する作業の一環でもあるが、これ迄から続けている知的機能の形成過程研究に位置づけられる。そこで、このような研究は、乳幼児研究としてまとめておくことにする。乳児を対象とした研究は、主として京都市の乳児院、大阪市立母子センター、京大医学部付属病院の3カ所で行った。

京都市児童院内の乳児院、指月寮における追跡検査を資料Sと呼んでいる。資料の内容は、1981年から1988年までの7年間、週1回、筆者自身を通して21人の児に延べ1497回、新版K式発達検査を行った検査結果である。0歳初期に検査を開始し、退寮する概ね3歳まで追跡検査した。一部の児については、その後、学童期の検査結果も得ている。

現在は統合廃止された「大阪市立母子センター」における資料が3つある。学生が卒業論文として収集してくれた早期新生児の連続観察である。新生児は時間帯によって覚醒水準に差がある。そのため毎日、一定の時間を通して観察する必要がある。早朝が望ましい労力の大きい観察で、資料収集に携わった学生の名前を付して、資料M・資料W・資料Oと呼んでいる。南川朋子による資料Mは、早期産新生児を対象として、入院期間中、出産日から退院日まで姿勢運動の発達を毎日観察した。観察期間は、1986年9月2日から12月6日迄の35日である。被検児は、在胎週数23週4日から36週4日の間に生まれ、生下時体重が600gから2730gの児24（男10、女14）人である。姿勢運動を詳しく調べるために、上肢・下肢・頭部に分けて細かく観察している。上肢については、手掌の運動についても細かく観察した。結果は発表しているが、これまで、ほとんど自発的な運動機能を持たないように考えられてきた新生児期にも、児は活発な運動をしていることが明らかとなった。脇万里子による資料Wは、正期産正出生体重児と早期産低出生体重児に分けて手掌の運動を細かく比較観察した。検査期間は、1987年9月2日から11月23日迄の毎日であり、被検児は在胎週数が25週6日から32週2日の間であり、生下時体重が875gから1650g迄の早期産児12（男7、女5）人と、在胎週数が36週以上で生下時体重が2500gを超える正期産児15（男9、女6）人である。出産時の成熟が運動にどのように影響しているかを調べるためである。このような観察の結果、標準となる正期産（満期産）児の運動発達について正確な資料を得る必要性が生じた。大槻裕紀による資料Oは、観察期間が1990年9月2日から11月7日までの毎日であり、被検児は在胎週数が37週を超え42週未満であり、生下時体重が2500g以上の正期産児126（男66、女58）人である。児の入院期間であるおおむね10日間の追跡観察を行った。現在、この結果を逐

次分析報告しているが、今後、この資料を正期産児の運動発達として、これまでの資料と比較する必要がある。現在、京大経済学部にいる友人田尾雅夫が示唆したように、京都府立大学の学生は非常に有能な資料収集者であり、彼女たちの協力無しに、これだけの作業は遂行出来なかった。改めて感謝の意を表したい。

筆者自身は現在、京大病院のNICUと小児科外来で早期産新生児を中心とした乳幼児の追跡検査と母親の相談活動を継続中である。京大病院における検査は、前に述べたような事情で筆者が富山医科薬科大学から京都に赴任して始めた。検査の開始は、1987年からで、筆者が週1回未熟児センターと未熟児外来に通い始めて13年間になる。周産期の様子を中心とした医学的資料を調べて入力する作業には、西村睦美、上川真由美、倉内奈津子、布村由香里、塩見美幸と歴代の学生が協力してくれた。その他にも、検査の補助として多くの学生の協力を得ている。

## 5-6 その他

以上に纏めた以外にも、研究機関等に依頼されて行った共同研究や、地域住民を対象とした調査、学生の卒論指導を通して、学生の興味に合わせて計画した、子ども相互のやり取りを通して発生する初期の言語発達を調べた一連の研究もある。重要な資料と考えないものは、記載を省略した。整理を初めてみると、現時点では発見できない資料もあるが、主要な資料はほぼ手元にあった。発見していない資料には多少の抜け落ちがあると思われるが、これまでに行った、主要な研究はほぼ網羅したつもりである。

その他の資料を2・3挙げると、池坊短期大学に在職していた時には、学生相談室長を兼務し助手として卒業生を採用していたので業務として学生のアンケートを実施した。また、富山医科薬科大学では、医学部に属していたので、学生を対象として内科的治療から手術へと決断する意志決定の機制を調べる目的で、薬学部学生を対照群としてアンケート調査を試みた。

また、心理学とは直接関係ないが、「京都市児童福祉百年史」の編纂事業に参加して障害児の部門を執筆した。明治期から京都市の発展過程を知ることは印象深い作業であった。

あまり勤勉とは思えない筆者ですら、現在までに行った研究は巻末の付表に纏めたように多岐にわたるし、資料の全容はとうてい一口で説明しきれない。心理学に対する発想は、このような研究を通して徐々に形作られてきたに違いない。学問の世界は、一つのことを調べるだけでもテレビ番組に見られるように簡単には結果が得られない。一人の心理学者を作るというのは、ごく概略を述べてもこのように時間と暇のかかる作業だということが理解していただけると幸いである。

## 6. 終わりに

最近、臨床心理学への関心が高まるのは嬉しいが、心理学の基礎知識無しに相談業務に就きたがったり、講習会などで簡単に資格を得たがる人が多い。最初にも述べたことであるが、子ども

の発達を正しく理解し、母親などの相談に当たろうとするのなら心理学について全般的な知識を持ち方法論を十分に体得する必要がある。十分な知識と経験を持たずに相談活動に従事したり、一つの心理検査だけを使えるようになりたいなどとは考えないでほしい。そのような検査者の行う検査には検査の信頼性もないし、そのような検査者の助言活動には百害があるとは、ビネーがすでに今世紀の始めに論文の中で指摘している言葉である。心理検査を行うには、少なくとも心理学を専攻して修士課程を修了する必要があると考えている。

考えてみると我々大学教員は、最も資格に縁がない種族のようである。自身を振り返っても運転免許以外の資格を取った覚えがない。我々の時代には他人に習うより、必要に応じて自分で身につけていった。現在は、資格の世の中と言われ森羅万象有りあらゆる資格がある。技術や知識の内容も指導力もお粗末な有資格者が世間に溢れている。資格者の養成機関も、知識を伝え技術を磨くより講習会の会費を集め免許状を売ることに熱心である。心理学関係者の中にも臨床心理関係の免許を商売にする連中が増えていて、関係者の一人として心苦しい。

改めて、自分の歩んできた道を振り返ってみると幾つかのことが気になる。最後に、年寄りの気楽さで好き勝手なことを書いてみよう。筆者は幸いなことに国立・公立・私立の全てを経験した。所属学部も、医学部から文学部まで幅広く経験できたのは良かった。世の中には、一つの大学だけを見て大学全体を論じる人が多い。自分が所属した医学部の場合を考えてみても、教授会に出席して内側から見ると長所も短所も含めて、いろいろな特色が見えてくる。また、同じ医学部の教官だと知ると他大学の先生方も急に安心して内部の話聞かせてくれるので、自分の大学だけの問題と医学部に共通する構造との相違もよくわかる。人は自分の経験を通して理解するから、他大学に行っても、その学校の様子がよくわかる。同じ大学の中でも薬学部については、噂や遊びの機会しか触れ合うことが無く、内部の実状について十分には理解しがたい。これが異なった大学を経験することの利点であろう。

また、職場として種類の異なった多くの大学を経験したため、分野の違う先生方と友人になり、見聞を広げ考え方の幅を広げられた。振り返ってみると、人生の中で、大学以外に友人を多く得、専門外の友人を持つ機会に恵まれたのは有益であった。池坊では芸術分野の先生に啓発されたし、富山では医学部に属したのが幸いした。内科・外科・生理学・公衆衛生・病理・和漢薬等々幅広く医学の話聞けたし、口腔外科の古田教授には虫歯の治療だけでなく歯科診療の世界にも知見を広げてもらった。一般教養では物理学の豊富先生に物理世界の多くの疑問に教示を受けただけでなく実験装置の製作でも世話になった。その他にも法学等色々な先生と親しく議論できた。府立大学に来た当初、国語学の木田先生（現、京大教授）とは大いに議論を楽しみ示唆されることが多かった。考えてみると、同一学科の先生より学部や学科の異なる先生との議論が知的好奇心を満たし有用であった。

世間で一番誤解されているのは、大学教員の給料が必要以上に高いように思われていることと、教員が皆、学部長や学長になりたがっているように考えている点にある。先輩には学部長をさせられそうになって、自分から退職して短大に転職した人さえいる。学生時代から尊敬に値すると

思っていた先生方は皆、学長どころか学部長にさえならなかった。大学では、研究と大学組織への貢献は両立しがたい。大学にも運営は必要であるが、運営だけでは大学は成り立たない。最も重要なのは研究の水準を上げることだと考えている。大学では教員が熱心に研究している姿に触れることが学生にとって最も良い指導になる。大学全体の研究水準が上昇すると学生の質は自然についてくる。アメリカ心理学会の調査では、一般の大学教員は自分が大学の修士課程で学んだ水準の内容を一生教えている。残念なことにどこの大学にも研究より人事や学校運営に情熱を傾ける教員が多い。不思議なことに学校によって議論の中心となる対象や重要とされる手続きは異なるのだが、実験や診療で多忙な分野では議論が早く済み、文化系や暇人が多いとどうしても良い屁理屈のような議論で時間が長引く。多忙で研究に集中している研究者が大学に相応しい論拠の一つである。

現代は形式的平等主義を振りかざすが、現実の大学は想像以上に格差が大きい。学生の格差と考えられるかもしれないが、大学の質はまず一番に事務職員に反映され、二番目が教員であり、学生にはまだ望みがある。その意味は、学校によって学生の質は異なるが、どのような学校にも優れた学生が混じっているし、若いだけにまだ可能性を秘めている。また、地方の大学に優れた教員が隠れている事もあり、東大や京大にも無能な教官がいる。しかし、平均的に見ると教員の水準は学生に相応しい。世の中に現在の大学全てを満たすほど有能な教員はあり得ないと考えられる。大学問題の本質はここにあるだろう。そのような意味では、最後の数年間、若くて優秀な尾入正哲・上田和夫と3人で心理学を担当し、心理学について対等な議論の相手を得た事は、刺激に満ちた楽しい経験となり、この論文もその成果と言える。

少なくとも大学の教員は、一つの大学に長期間留まらず多くの大学を経験する方がよいと考えている。自分の経験で言えば、どこの大学でも初めの2・3年の学生は印象が良く残っている。学生にとっても同じであろう。最近助手の任期制が問題となっているが、任期はむしろ教授にこそ必要である。教授として一つの大学に留まるのは精々10年が限度だろう。在職年数が長くなるほど新鮮さが失われ、弊害が増加する。研究に集中せず、学内人事や運営に興味を集中する有害な教員がどこの大学にも転がっている。手っ取り早い解決方法として、教授の任期を10年とするのはどうだろう。若くして教授になりたがる教員が減るであろう。早く教授になりたい人はおおいに業績を上げるのがよい。有能であれば、必ず他の大学が迎え入れてくれるだろう。

#### (参考文献)

参考論文として記載したのは、本文と関係する論文、本文の内容を補足する主要な論文のみを本文の構成にあわせて分類記載した。同じ研究の発表については、代表的な一つを選んでいく。必要であればそこから関連文献について調べられるからである。著者名については、筆者単独の論文は著者名を省略した。筆者が筆頭著者である論文は、筆者の名前を省略し他の著者名を記した。筆者が筆頭著者でない論文では、筆者の名前を含めて著者名を記載した。

##### (1) 集団と創造性の研究

1. 1967年 島久洋・高木修・鳥山平三・向井泰彦・藪内稔・辻平治郎「集団と創造性」(その6)



## 心理学のすすめ

- 日本心理学会第31回大会発表論文集(東京教育大学), p470
- (2) 臨床活動の研究
- 2-1 京都市児童院
- 1985年 「発達に遅れがある就学前幼児と母親の集団指導」富山医科薬科大学一般教育研究紀要, 第7号, p1~23
  - 1987年 『就学前の子ども(精神発達遅滞を主とした幼児)と母親のための「母子教室」』の試み(1)制度と運営について, 京都府立大学, 人文, 39, p127~153
  - 1992年 『就学前の子ども(精神発達遅滞を主とした幼児)と母親のための「母子教室」』の試み(2)参加児童の変遷について, 京都府立大学, 人文, 44, p51~68
- 2-2 聖ヨゼフ整肢園
- 1987年 「重症心身障害児・者のための行動記録表」(麦の穂学園方式) 京都, 麦の穂学園(読売新聞社・愛のプレゼント研究助成出版), 全118頁
- (3) 性格検査の研究
- 3-1 MBTIの標準化
- 1974年 「Myers Briggs Type Indicatorの日本版作成の為に」(その1) 日本心理学会第38回大会発表論文集(広島大学), p506~507
  - 1975年 「Myers Briggs Type Indicatorの日本版作成の為に」(その2) 再検査法による信頼性, 日本心理学会第39回大会発表論文集(東京都立大学), p429
- 3-2 Rorschach Test研究
- 1972年 金光義弘・中島順子・金児暁嗣・松嶋隆二・鳥山平三・大平典明「ロールシャッハ図版における刺激要因」(その6) 日本心理学会第36回大会発表論文集(大阪大学), p460~461
- 3-3 動詞対性格検査の試み
- 1968年 高木修「動詞対を使用したPersonality Differential」日本心理学会第32回大会発表論文集(同志社大学), p348
- (4) 新版K式発達検査
- 4-1 検査の手引き・解説
- 1980年 嶋津峯真・生澤雅夫・中瀬惇「新版K式発達検査実施手引書」京都国際福祉センター
  - 1985年 嶋津峯真監修・生澤雅夫・松下裕・中瀬惇編著「新版K式発達検査法」京都, ナカニシヤ, 全460頁
  - 1999年 西尾博共編著「新版K式発達検査反応実例集」京都, ナカニシヤ出版(印刷中)
- 4-2 再標準化作業の学会発表
- 1981年 嶋津峯真・生澤雅夫・松下裕・中瀬惇「新版K式発達検査の標準化」(その1) K式から新版K式への歩み 日本心理学会第45回大会発表論文集(日本女子大学), p419
  - 1999年 「新版K式発達検査の標準化」(その26) 新生児の姿勢発達: 4 伏臥位の姿勢 日本心理学会第63回大会発表論文集(中京大学), p938
- 4-3 発達検査の終末年齢(上限年齢)の検討
- 1984年 「発達検査における終末年齢に関する研究」(その2) 拡大全資料の結果 富山医科薬科大学一般教育研究紀要, 第6号, p1~47
- 4-4 検査項目の検討
- 1985年 「新版K式発達検査の項目「絵の叙述」; 図版の変更と反応内容の分析」京都府立大学, 人文, 37, p139~173
  - 1986年 「新版K式発達検査の項目「財布探し」; 横断的資料による反応の発達の分析」京都府立大学, 人文, 38, p103~148
  - 1988年 「新版K式発達検査の項目「了解」; 横断的資料による反応の発達の分析」京都府立大学, 人文, 40, p125~153

19. 1990年 「新版K式発達検査の項目「数の復唱」; (その1)個別法による幼児の検査結果」京都府立大学, 人文, 42, P161~197
- 4-5 新版K式発達検査作成後の研究
20. 1990年 生澤雅夫・中瀬惇・辻本英夫「新版K式発達検査の拡張と精密化の研究」文部省科学研究費補助金(課題番号61410002)研究成果報告書, 全195頁
21. 1995年 「新版K式発達検査による未熟児尺度の追加と発達指導の体系化についての研究」文部省科学研究費補助金(課題番号05401004)研究成果報告書, 全108頁
- (5) 乳幼児の発達研究
22. 1989年 「乳児の発達検査による追跡研究; 資料S(その1)全体計画・被験者」京都府立大学, 人文, 41, P89~114
23. 1993年 「乳児の発達検査による追跡研究(その2)資料Sによる平均値の分析」京都府立大学, 人文, 45, P101~146
24. 1995年 大槻裕紀「新生児期の発達についての追跡調査(資料Oの概要)」京都府立大学, 人文, 47, P159~178
- (6) その他
- 6-1 老人の機能研究
25. 1992年 HOTTA C., SHIMADA M., NAGANAWA H., NAKASE A., & NISHIOKA A. "CHARACTERISTICS OF LEARNING TRANSFER IN THE AGED" MOTOAKI H., MISUMI J., & WILPERT B., ED "SOCIAL, EDUCATIONAL AND CLINICAL PSYCHOLOGY" PROCEEDINGS OF THE 22ND INTERNATIONAL CONGRESS OF APPLIED PSYCHOLOGY VOL 3
- 6-2 その他
26. 1971年 「行動法則の基本に関する一考察」池坊短期大学紀要, 第四号, P57~64
27. 1975年 田中 百合子「アンケート調査にみる現代の短大生」池坊短期大学紀要, 第五号, P61~78
28. 1990年 京都市児童福祉史研究会, 「京都市児童福祉百年史」(分担執筆, 第5章「障害児福祉」, P152~190), 京都市, 全645頁

(付 表)

5-1 卒業論文と修士論文

付表1 卒業論文の資料

資料の内容 同調行動  
 知能検査  
 YG性格検査  
 適応性診断テスト  
 ソシオメトリー

|     |        |
|-----|--------|
| 所 属 | 小学校5年生 |
| 人 数 | 75     |

付表2 修士論文の資料

資料の内容 MBTI  
 A-D図形選択  
 A-D質問紙  
 Rorschach Test  
 院生については更に思考実験

| 所 属    | 被 験 者 数 |
|--------|---------|
| 京大生男子  | 117     |
| 奈良女子大生 | 131     |
| 京大院生   | 27      |

5-2 臨床関係の資料

(1) 京都市児童院

付表3 母子教室の資料

|       |             |
|-------|-------------|
| 機 関 名 | 京都市児童院      |
| 名 称   | 母子教室        |
| 期 間   | 1973-1981年  |
| 回 数   | 25期         |
| 参加者人数 | 171人        |
| 機 関 名 | 京都市児童福祉センター |
| 名 称   | 総合療育事業      |
| 期 間   | 1982-1987年  |
| 回 数   | 30期         |
| 参加者人数 | 201人        |

全体の期間 73/06/10~87/03/31

参加総人数 372人 延 1536人

(2) 聖ヨゼフ整肢園

付表4 重症心身障害児・者のための  
 行動記録表(麦の穂学園方式)

|       |            |    |
|-------|------------|----|
| 作成期間  | 1982-1987年 |    |
| 評価対象児 | 初回対象者      | 37 |
|       | 追跡対象者      | 32 |

その他に小児科外来の検査記録

付表5 マリア養護学校就学面接の記録

|       |                  |     |
|-------|------------------|-----|
| 期 間   | 82/5/11～93/11/24 |     |
| 対 象 児 | 就学時・在籍児          | 153 |

5-3 性格検査の資料

(1) MBTIの資料

NX知能検査, YG性格検査等と平行実施

付表6 池坊女子短大生

| 年 度  | 組   | MBTI | Y G | N X | アンケート |
|------|-----|------|-----|-----|-------|
| 1970 | 家 政 |      |     | 289 |       |
| 1972 | 国 文 | 136  |     |     |       |
|      | 家 政 | 257  |     |     | 201   |
| 1973 | 国 文 | 105  | 164 |     | 160   |
|      | 家 政 | 118  | 436 |     | 434   |
| 1974 | 国 文 | 143  |     |     |       |
|      | 家 政 | 128  |     |     |       |
| 1975 | 国 文 | 43   |     |     |       |
|      | 家 政 | 35   |     |     |       |
| 合 計  |     | 965  | 600 | 289 | 795   |

1975年度119人は、検査再検査の2回施行

付表7 富山医科薬科大学

7-1 医学部

| 年 度  | 組 | 人 数 | MBTI | Y G | N X |
|------|---|-----|------|-----|-----|
| 1976 |   | 100 | 95   | 63  | 58  |
| 1977 |   | 109 | 97   | 98  | 106 |
| 1978 |   | 102 | 94   | 97  | 95  |
| 1979 |   | 100 | 99   | 91  | 93  |
| 1980 |   | 100 | 98   | 99  | 92  |
| 1981 |   | 102 | 98   | 84  | 103 |
| 1983 |   | 82  | 0    | 28  | 44  |
| 1984 |   | 86  | 104  | 72  | 64  |
| 合 計  |   | 781 | 685  | 632 | 655 |

Y G : 52年度98人, 12尺度について, 自己評定と他者評定

MBTI : 54年度, 97人: 4/13と10/20の2回検査

心理学のすすめ

7-2 薬学部

| 年度   | 学生数 | 受講生 | MBTI | Y G | N X |
|------|-----|-----|------|-----|-----|
| 1976 | 104 | 89  | 89   | 90  | 66  |
| 1977 | 112 | 106 | 94   | 99  | 102 |
| 1978 | 105 | 0   | 105  | 100 | 102 |
| 1979 | 105 | 103 | 104  | 99  | 96  |
| 1980 | 103 | 96  | 84   | 92  | 90  |
| 1981 | 106 | 50  | 91   | 28  | 91  |
| 1982 | 105 | 0   | 0    | 0   | 60  |
| 1983 | 107 | 97  | 0    | 46  | 77  |
| 1984 | 105 | 87  | 51   | 33  | 53  |
| 合計   | 952 | 628 | 618  | 587 | 737 |

Y G : 52年度105人, 12尺度について自己評定と他者評定  
54年度, 104人は4/14と55/3/10の2回検査

付表8 京都府立大学

| 年度   |            | MBTI | Y G | N X      |
|------|------------|------|-----|----------|
| 1985 |            | 24   | 25  | 27       |
| 1994 |            |      |     | 37       |
| 1995 | 3回生<br>2回生 |      | 43  | 41<br>45 |
| 1996 |            |      | 32  | 33       |
| 合計   |            | 24   | 100 | 183      |

(2) ロールシャッハ図版における刺激要因の研究

付表9 全被験者の資料

| 年度   | 対象    |     | 図版  |     |     |     | Total |
|------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
|      |       |     | C   | A   | S   | P   |       |
| 1968 | 幼稚園   | 年長  | 40  | 31  | 28  | 28  | 127   |
| 1970 | 小学校   | 3年生 | 31  | 25  | 31  | 28  | 115   |
|      |       | 5年生 | 71  | 56  | 59  | 56  | 242   |
|      |       | 合計  | 142 | 112 | 118 | 112 | 484   |
| 1972 | 女子短大生 | 国文  | 61  | 25  | 54  | 37  | 177   |
|      |       | 家政  | 78  | 41  | 62  | 79  | 260   |
| 1973 | 女子短大生 | 国文  | 90  | 111 | 66  | 100 | 367   |
|      |       | 家政  | 27  | 73  | 62  | 50  | 212   |
|      |       | 合計  | 256 | 250 | 244 | 266 | 1016  |

注: 中学生, 高校生の資料不明

5-4 新版K式発達検査

(1) 付表10 発達検査における終末年齢の資料

期間 1983~1984

| 被 験 者 |     | 男    | 女    | 合 計  |
|-------|-----|------|------|------|
| 小 学 校 | 1   | 45   | 41   | 86   |
|       | 2   | 55   | 45   | 100  |
|       | 3   | 48   | 39   | 87   |
|       | 4   | 49   | 59   | 108  |
|       | 5   | 43   | 58   | 101  |
|       | 6   | 57   | 57   | 114  |
| 中 学 校 | 1   | 144  | 123  | 267  |
|       | 2   | 166  | 156  | 322  |
|       | 3   | 142  | 143  | 285  |
| 高等学校  | 1   | 119  | 119  | 238  |
|       | 2   | 99   | 103  | 202  |
|       | 3   | 26   | 48   | 74   |
| 短期大学  | 1   | 158  | 248  | 406  |
| 大 学   | 2   | 59   | 191  | 250  |
|       | 3   | 53   | 125  | 178  |
|       | 4   | 9    | 16   | 25   |
|       | 合 計 | 1272 | 1571 | 2843 |

(2) 新版K式発達検査の項目分析

付表11 絵の叙述

期 間 1985

被験者 保育所, 幼稚園

| 年 齢            | 男   | 女   | 合計  |
|----------------|-----|-----|-----|
| 4 : 0 ~ 4 : 11 | 7   | 10  | 17  |
| 5 : 0 ~ 5 : 5  | 38  | 31  | 69  |
| 5 : 6 ~ 5 : 11 | 23  | 26  | 49  |
| 6 : 0 ~ 6 : 5  | 29  | 28  | 57  |
| 6 : 6 ~ 6 : 11 | 28  | 33  | 61  |
| 合 計            | 125 | 128 | 253 |

付表12 財布探し

期 間 1986

被験者 幼稚園, 小学校

|     |     | 男   | 女   | 合計  |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 幼稚園 | 年 中 | 70  | 72  | 142 |
|     | 年 長 | 87  | 73  | 160 |
| 小学生 | 1年生 | 42  | 38  | 80  |
|     | 2年生 | 38  | 35  | 73  |
|     | 3年生 | 45  | 50  | 95  |
|     | 4年生 | 49  | 46  | 95  |
|     | 5年生 | 49  | 56  | 105 |
|     | 6年生 | 36  | 40  | 76  |
| 合 計 |     | 416 | 410 | 826 |

付表13 了解

期 間 1988

被験者 保育所, 幼稚園, 小学校

| 年 齢              | 男   | 女   | 合計  |
|------------------|-----|-----|-----|
| 2 : 0 ~ 2 : 5    | 4   | 8   | 12  |
| 2 : 6 ~ 2 : 11   | 22  | 9   | 31  |
| 3 : 0 ~ 3 : 5    | 18  | 22  | 40  |
| 3 : 6 ~ 3 : 11   | 20  | 20  | 40  |
| 4 : 0 ~ 4 : 5    | 36  | 56  | 92  |
| 4 : 6 ~ 4 : 11   | 61  | 52  | 113 |
| 5 : 0 ~ 5 : 5    | 44  | 50  | 94  |
| 5 : 6 ~ 5 : 11   | 32  | 35  | 67  |
| 6 : 0 ~ 6 : 5    | 73  | 71  | 144 |
| 6 : 6 ~ 6 : 11   | 24  | 16  | 40  |
| 7 : 0 ~ 7 : 11   | 19  | 28  | 47  |
| 9 : 0 ~ 9 : 11   | 74  | 56  | 130 |
| 10 : 0 ~ 10 : 11 | 25  | 21  | 46  |
| 合 計              | 452 | 444 | 896 |

付表14 数の復唱

期 間 1990

被験者 保育所, 幼稚園

| 年 齢            | 男   | 女   | 合計  |
|----------------|-----|-----|-----|
| 3 : 0 ~ 3 : 5  | 2   | 4   | 6   |
| 3 : 6 ~ 3 : 11 | 3   | 4   | 7   |
| 4 : 0 ~ 4 : 5  | 21  | 25  | 46  |
| 4 : 6 ~ 4 : 11 | 53  | 66  | 119 |
| 5 : 0 ~ 5 : 5  | 112 | 111 | 223 |
| 5 : 6 ~ 5 : 11 | 176 | 169 | 345 |
| 6 : 0 ~ 6 : 5  | 57  | 63  | 120 |
| 6 : 6 ~ 6 : 11 |     | 1   | 1   |
| 合 計            | 424 | 443 | 867 |

5 - 5 乳幼児の発達過程追跡検査

(1) 児童院指月寮

付表15 資料S

内 容 乳児院追跡検査

期 間 1981/07/10~1988/01/08

| 被 験 者 | 検 査 回 数 |
|-------|---------|
| 41    | 1499    |

(2) 大阪母子センター

付表16 資料M

内 容 未熟児新生児の上肢・下肢・頭部の手掌の姿勢運動発達

期 間 1986/09/02~1986/12/06

観察者 南川朋子

被験者 37週未満のAFD児

在胎週 23w4d~36w4d

生下時体重 600 g ~ 2730 g

| 男  | 女  | 観察回数 |
|----|----|------|
| 10 | 14 | 234  |



付表17 資料W

内 容 手掌の状態  
 期 間 1987/09/02～1987/11/23  
 観察者 脇 万里子  
 被験者 正規出生児 36w超, 2500 g 以上  
           早期出生児 25w6d～32w2d      875 g～1650 g

|       | 男  | 女  | 合 計 | 観察回数 |
|-------|----|----|-----|------|
| 正規出生児 | 9  | 6  | 15  | 107  |
| 早期出生児 | 7  | 5  | 12  | 256  |
| 合 計   | 16 | 11 | 27  | 363  |

付表18 資料O

内 容 正期産児の新生児期の連続観察  
           出生児の産科記録  
 内 容 1990/03/28～1990/11/07  
 観察者 大槻裕紀  
 被験者 正期産児  
           37週以上42週未満, 生下時体重2500 g 以上

| 男  | 女  | 合 計 | 観察回数 |
|----|----|-----|------|
| 66 | 58 | 124 | 720  |

(3) 京大病院

付表19 音刺激による呼吸数の変化

期 間 1988/02/18～1988/09/01

|       | 被験者数 | 観察回数 |
|-------|------|------|
| 統 制 群 | 20   | 218  |
| 実 験 群 | 17   | 119  |

付表20 京大未熟児センター入院台帳

期 間 1968/08/13～  
 記録者 西村睦美, 上川真由美, 倉内奈津子,  
           布村由香里, 塩見美幸

|       |      |
|-------|------|
| 入 院 児 | 2250 |
|-------|------|

99/8/31日現在

付表21 資料K

内 容 未熟児外来による追跡検査

期 間 1986/10/02～

|         |      |
|---------|------|
| 被 験 者   | 581  |
| 検 査 回 数 | 1530 |

99/8/31日現在

(1999年9月14日受理)

(なかせ あつし 福祉社会学部教授)